郷土館発
ニュウギ

郷土館復元農家前の門松

旧正月には、伝統的な祀りものが数々あり、中でも門松や神棚などいろいろな所に祀られるものとしてニュウギがある。このニュウギはクリ・カシなどの木を割って作り、平年は「十二月」、閏年は「十三月」と書く。ニュウギは新木（にいぎ）の転のようである（広辞苑より）。

この地区でも、門松に大きなニュウギを供えるだけでなく、家の中の各所、自分の家の周辺の石仏や祠等に小さなニュウギを供えたようである。

この小ニュウギを墓などに供えるのを「むしょう参り」と呼んだ。これは、東栄町誌に「旧正月元旦、雑煮を祝った後、重箱に賽の目に切った餅や洗米、小さなニュウギを用意し、組内や村内の墓や野仏を有縁無縁の別なく拝んで回った。」「上粟代の日記、旧正月十五日の項に『墓所参り』と記述されている。墓所は古い表現で『むしょ』と読む。このことから『むしょう参り』は『墓所（むしょ）参り』の転と思われる。」と書かれている。

むしょう参りに使う小ニュウギ

今年の旧正月、清崎の夏目さん宅の正月飾りを拝見しに伺った時、小ニュウギをお墓に供えると聞き、多宝寺の墓地を見に行った。あちこちの墓にニュウギが供えられているのを見て、この地区は昔ながらの風習を残している家がたくさんあるんだなあと感心したが、どうやら早とちりだったようである。

もうひとつ、ニュウギに関する愉快なお話。

墓前に供えられたニュウギ

魔除のニュウギ

夏目さんのお宅から、昨年作られた様々な祀りものを頂いてきたが、その中に「魔除のニュウギ」というのがある。これは、二本が対になっており、一本には十二本の横線が描かれており、もう一本には十三本の横線が描かれている。頭にはそれぞれヒイラギの枝がさしてある。

大みそか、門口にこのニュウギを置いておく。やってきた鬼が戸間口から入ろうとして、このニュウギを見る。「はて？今年は十二月だったかな。十三月だったかな。」よく見るために目を近づけたいが、ヒイラギに目をさされるので近寄れない。十二か十三か迷い、考えているうちに夜が明けてしまい、鬼は仕方なく帰っていく。

（奥三河郷土館
館長　平松　博久）